岩戸開
道歌集

259
836

第八巻

特50
879

皇后宮御歌

よきともに
ましはるひとは
れのつから
みのれてなひも
ただしかりけり

右は明治三十九年十一月二十五日歌道奬勵會に賜ひしものなり謹しみて寫してここに掲ぐ

問うて曰はく。罪咎祟と申す事は如何なる事を申し候や、一通りは人々わかり候やう存し候へども、委しくは分りかね候まま御尋ね申上げ候

答へて曰はく、此の日本は神國にて、高山短山に座す御神、一の宮、所の産土神、八百萬の御神、其所の者を守り玉ひて、功有るものに幸ひをあたへたまひ、悪しきものに災ひをあたへ玉ふ。然れ共、あらはなる事は瓊々杵尊の掌り玉ふとて、姿にあらはれ人々の知る所の

善悪は、一天萬乘の君の掌り玉ふ所にて、形罪を以て御政事正しく行ひ玉ふなり。又姿にあらはれず、世の人の見ぬ所、知らぬ所にてつくりたる悪事善事、又は心のうちにてつくりたる悪念善念を諭し玉ふは、神のあづかり玉ふ所にて、利益形罪明らかにして、是れ罪を咎め祟り玉ふと言ふ事なり。又祟りと申す事は、人を悪めば人我をにくむをいふなり。先づ神の御心に叶はざる心をもてば、其の人常に心配止む事なし、

これを神の咎めといふ。其の苦勞心配募りて氣血をとどめ、病ひを生ずるこれを祟りといふなり。然るに、世の人苦勞なきもの稀なり、故に神の御心に叶ふものの稀なりと思ふべし。若し苦勞心配なく心安くば、神の御心に叶ひしと思ひ玉ふべし。少しの苦勞心配有らば、少しく神の御心に叶はざると思ふべし。苦勞心配大いにあらば、神の御心に大いに違ひて、後々は病難か災難來ると思ふべし。

右教祖井上正鐵大人御教訓の一節を證してはしがきの代りとなす

明治四十二年十一月二十三日

中山瀧太誌す

（一）

世界中。かゞやくやたの。御鏡は。やまと心の。すがたなりけり。

（二）

ますら男の。眼は八咫の。鏡にて。勇氣はつるぎ。眞ごころは玉。

（三）

眞心のあはせ鏡の御をしへは。世界平和のもとゐなりけり。

（四）

天照す神の鏡の御をしへを。うけてうつせや。世の中の人。

（五）

日は鏡。虚空は玉に。風は太刀。息は造化の。神とこそ知れ。

（六）

萬物は。造化の神の。かたちにて。息は造化の。神の御こころ。

（七）

ころす神。あれば助ける。息神の。
道をまもれば。死ぬる事なし。

（八）

まじなひも。祈禱もきかぬ。文明の。
ひとは信ぜよ。神明の息。

（九）

神明の。息はあたまの。つむじより。
つめの先まで。行き通ふなり。

（十）

萬國を。人のからだに。たとふれば。
あたまもあれば。手も足もある。

（十一）

國の中の。あたまは先に。産れ出て。手足の國は。後にそなはる。

（十二）

地球上。どこが頭か。手か足か。神代の卷を。見てさとるべし。

（十三）

大元の。てんに太陽。ひとに息。地球のなかに。日の本のくに。

（十四）

日の本の。きみは世界の。きみのきみ。諸國のきみは。その手足なり。

（十五）

日の本に。うむけし國は。昔から。
皆手をやいて。居ると知らずや。

（十六）

日の本の。君は世界の。みたまにて。
息は我が身の。みたまなりけり。

（十七）

家國の。みだるる元は。しきしまの。
神の教に。たがふゆゑなり。

（十八）

敷島の。やまと心の。御をしへを。
受けてみたまの。働きを知れ。

（十九）

敷島(しきしま)の。やまと心(こころ)の。はたらきは。すべて神變(しんぺん)。ふしぎなりけり。

（二十）

他(た)の國(くに)の。理屈倒(りくつだふ)れに。なるを見(み)て。我(わ)が國體(こくたい)の。たふとさを知(し)れ。

（二十一）

あらたふと。神代(かみよ)のむかし。神等(かみたち)の。定(さだ)めたまひし。みろろぎの道(みち)。

（二十二）

佛法(ぶっぽう)も。やうも儒道(じゅどう)も。神道(しんたう)の。息(いき)の教(をしへ)に。よらぬものなし。

（二十三）

末は本に。枝葉は幹に。したがうて。
和合のみちを。開け世の人。

（二十四）

和合ほど。力のつよき。ものはなし。
和合せざれば。事は破れる。

（二十五）

世界中。なかをよくせよ。日の本の。
岩戸開の。みちををさめて。

（二十六）

働きの。出來る體を。持ちながら。
なにも悔むな。世の中の人。

（二十七）

世の中の。人は元より。草も木も。すべて伊佐那岐。伊佐那美の御子。

（二十八）

口あらば。知る人に問へ。耳あらば。知る人に聞け。神の御をしへ。

（二十九）

みそぎして。むねの岩戸を。開くゆゑ。あらはれたまふ。日の神の息。

（三十）

日の神の。息ひとすぢの。御めぐみ。知れば知る程。たふとかりけり。

(三十一)

一つ火を。心につけて。よく見れば。我が腹わたの。きたなさを知る。

(三十二)

明玉は。我が息神と。わきまへて。外をさがすな。世の中の人。

(三十三)

人の身に。行ひやすき。やす國の。道はみろぎの。教なりけり。

(三十四)

いにしへの。禊の道の。あらはれて。明治の御世に。あふも神業。

（三十五）

神むすび。高皇むすびの。神業に。むすび堅めよ。れのが眞心。

（三十六）

萬法の。もとは神國。根元の。はらひ修行の。教なりけり。

（三十七）

身のはしら。たてる精神。教育は。天つのりとの。太のりとなり。

（三十八）

身の柱。たててみたまの。働きを。知れば心は。ほかに迷はず。

（三十九）

れの身に。一番ちかい。神なれば。
あけくれ仰げ。父と母とを。

（四十）

子育の。手かずは人の。をしへにて。
生長するは。息の神わざ。

（四十一）

種まきて。作るは人の。ちからにて。
みのるは神の。ちからなりけり。

（四十二）

家國も。神の助けの。なかりせば。
人智のみでは。長くたもたず。

（四十三）

わざはひの。ある度毎に。おどろきて。
ふりかへり見よ。おのが身の上。

（四十四）

向見ず。我が身の程を。かへり見て。
息と衣食の。道をまもれや。

（四十五）

雇ひ人。つかふ心が。うろなれば。
かけし恵みは。皆あだとなる。

（四十六）

災難は。つくりし罪の。終りにて。
又我がままは。その始めなり。

(四十七)

災難を。うけて氣の付く。人もよし。
先に氣のつく。人はなほよし。

(四十八)

玉手ばこ。開けて見すれば。驚いて。
みな眞心の。目をさますなり。

(四十九)

昔から。人の行く末。見わたせば。
誠はたもつ。うそはたもたず。

(五十)

親なれば。旅に出た子を。思ふなり。
雨のふる日も。雪のふる夜も。

（五十一）

世の中に。無理が通れば。しばらくは。
まことの道も。かきくもるなり。

（五十二）

をりにふれ。さまぐ\かはる。心根に。
息ひとすぢの。糸つけてれけ。

（五十三）

はらはねば。心の鬼の。大てきに。
身も家國も。せめらるるなり。

（五十四）

やき鎌の。敏鎌をもちて。斬りはらへ。
眞心枯らす。草もかつらも。

(五十五)

六根を。みがくみそぎは。七情の。
やまひをはらふ。薬なりけり。

(五十六)

七情の。やまひをはらふ。御薬は。
神のをしへの。外なかりけり。

(五十七)

高砂の。翁や嫗やの。手にもてる。
箒くまでも。神の御をしへ。

(五十八)

みそぎして。心の山を。きりはらひ。
まことの道を。ひらけ世の人。

(五十九)

みな人の。からだは息の。神やしろ。大鼓たたいて。御祓をせよ。

(六十)

夜もすがら。月をながめる事もよし。岩戸開の。御日まちもよし。

(六十一)

御日まちは。神の社に。みそぎして。むねの岩戸を。ひらく御教。

(六十二)

御教の。道にそむける。人はみな。すべて自殺の。すがたなりけり。

(六十三)

神風に。草はかれても。木はのこる。
氣の心根を。さとれ世の人。

(六十四)

草の根も。木の根も人の。心根も。
みな神明の。息のいさをし。

(六十五)

息よりも。金をたからと。思ふ身は。
常にまことの。安心はなし。

(六十六)

金銀は。下照ひめの。こころにて。
いきは天照。大御神なり。

（六十七）

日は出たり。あま戸を開けて。掃除せよ。
いつまでねても。際限はなし。

（六十八）

くよくよと。苦勞心配するよりも。
つとめ働く。身こそ安けれ。

（六十九）

不義不忠。不孝の人は神明の。
息の天罰。うけて苦しむ。

（七十）

心臓も。肺も胃腸も。すこやかに。
なるは禊の。をしへなりけり。

（七十一）

精神のくもる時には。吹きはらへ。
はらへばやがて。むねは晴天。

（七十二）

はらはねば。知らず〳〵の罪けがれ。
子にも孫にも。遺傳するなり。

（七十三）

畔放のつみをはらへば。家國や。
すべて上下のみさかひを知る。

（七十四）

溝埋の罪をはらへば。はらふほど。
つねに氣血の。循環もよし。

（七十五）

生剝の罪をはらへば。我が罪を。
他人になすりつける事なし。

（七十六）

逆剝の罪をはらへば。はらふほど。
さかさま事に。かかる事なし。

（七十七）

神道に。まさる誠の。みちはなし。
家は長久。國は安全。

（七十八）

幸福は。祈らずとても。來るなり。
まことの道を。まもる人には。

（七十九）

忠孝の。道をまもるも。師のめぐみ。
わすれぬもみな。神の御教。

（八十）

一點の。ちりも殘らず。吹きはらへ。
こころの底に。かよふ神風。

（八十一）

年徳の。神にそなへる。かがみもち。
れきつ鏡に。へつ鏡なり。

（八十二）

書物にて。わかりかねたる。事あらば。
我が身につとめ。行うて知れ。

（八十三）

何事(なにごと)も。承知(しようち)しながら。災(わざは)ひに。
かかるはおのが。心(こころ)がらなり。

（八十四）

世(よ)の人(ひと)の。心(こころ)の底(そこ)を。入(い)れかへる。
みそぎの道(みち)は。世(よ)のたからなり。

（八十五）

息神(いきがみ)を。まことの神(かみ)と。知(し)らぬゆゑ。
わたる浮世(うきよ)は。ゆめのうきはし。

（八十六）

浮世(うきよ)とて。かなしき事(こと)の。重(かさ)なるも。
我(わ)が息神(いきがみ)の。道(みち)知(し)らぬゆゑ。

(八十七)

つち船にのるな世の人。すめ神の。
息の御船にのりし身なれば。

(八十八)

まん心の。ともづなといて。息長に。
のるぞ樂しき。岩くすの船。

(八十九)

岩くすの。船は四海の。たからぶね。
身も家國も。皆のせるなり。

(九十)

世の人よ。鬼になるより。神になれ。
神の御息の。みちを守りて。

（九十一）

なま息を。祓ひ清めて。みわたせば。世界に鬼は。一人もなし。

（九十二）

息災に。まさる樂しき。事はなく。病ひにまさる。苦しみはなし。

（九十三）

大食や。美食を常に。なし居れば。のちは病ひの。種となるなり。

（九十四）

世の中に。みそぎの道の。なかりせば。病ひのかずは。いやまさるらん。

(九十五)

みそぎして。凡夫世界を。もぬくれば。神の世界に。いきかよふなり。

(九十六)

敬神も。愛國心も。そのもとは。ただ神明の。息にこそよれ。

(九十七)

よごれたる。心をきよく。入れかへる。道はみそぎの。教なりけり。

(九十八)

我が國の。みそぎの道の。御教は。皇祖宗の。御つたへなり。

（九十九）

父母の國にそむけば。親不孝。
君には不忠。世には不義なり。

（百）

大陽に。あまたの星の。從ふも。
世界平和の。かがみなりけり。

明治四十二年十二月八日印刷
明治四十三年一月一日發行

著作權所有

著作兼發行者　東京府平民　中山瀧太
東京市淺草區馬道町一丁目三號七番地

印刷者　東京府平民　中山清助
東京市淺草區馬道町一丁目三號七番地

印刷所　並木活版所
東京市淺草區黒船町二十八番地

259
836